The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	TA (Teaching Assistant) の声　サイバーメディアフォーラム no.11　CALLシステム
Author(s)	
Citation	サイバーメディア・フォーラム. 2011, 11, p. 43-45
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70305
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

全学共通科目における TA の新たな試み
－「教育者になるためのトレーニング機会の提供」という観点から－

山本 一晴（大阪大学 大学院人間科学研究科 グローバル人間学専攻）

1. はじめに

本学では、ティーチング・アシスタント（以下、「TA」という）の受け入れに関して、「教育者としてのトレーニングの機会を学生に提供する」ことを目的の一つとして規程している。また、全学共通科目に係る TA の実施要領においても同様に、「将来教育・研究者になるためのトレーニング機会の提供」を目的の一つとしている。

しかしながら、それらの目的を達成するための具体的な職務内容は、「講義補助及び CALL で利用する機器の操作補助等に当たる。特に、教材準備、コンピュータ・視聴覚機器類の操作、テストなどについて担当教員を補佐する」との記述にとどまっている。先に挙げた目的達成のためには、より教育者側に立ったトレーニングの導入が必要だと考える。

本稿の目的は、全学共通科目である「実践英語」の TA を担当した経験から、TA の職務内容である「講義補助及び…テストなど」の「など」について、より具体的な事例を紹介したうえで、WebOCM という Learning Management System を用いた受講生へのアンケート調査に基づいて TA の活動が及ぼす教育的効果を TA 側と学生側の両面から考察することである。

2. 研究の背景

2. 1 TA が担当した授業概要

筆者が TA として担当した授業は、2009 年度の 1 学期と 2 学期にわたって木曜日の 1 限に開講する「実践英語」である。竹蓋順子先生が担当し、リスニング力の向上に力点を置いている。大半の受講生は工学部 1 年次の学生で、受講者数は 45 名ほどであった。CALL 第 3 教室を講義場所として使用し、CALL 教室の機能を活かした授業を展開している（津山 2006）。TA は 1 学期に 1 名、2 学期は 2 名に増員して配置された。

2. 2 TA としての職務内容の概要

授業の流れに沿って TA としての職務内容を紹介する。授業が始まると、まず出欠の確認を行い、エクセルファイルに記入する。次に毎回 15 分ほどの確認テストがあるので、テスト時間中は机間巡視をする。テスト終了後は解答用紙を回収し、採点をする。その間、学生はリスニング教材を自習する。自習を終えた後、パワーポイントを利用した講義を 10 分間行う。その後、採点を終えたテスト結果の返却をする。以上が TA の職務の流れである。

その他に、CALL 教室で実施されるすべての授業にいえることかもしれないが、PC の操作補助がある。教員がセンターモニターを使用し丁寧に説明していても、途中で学生は操作がわからなくなることがしばしばあり、TA がその補助をする。学生が学習履歴保存用の USB フラッシュメモリを忘れた場合の対応や学習履歴を保存した先がわからない、またはコピー&ペーストの操作方法がわからない、といった PC の操作全般に関わることも補助している。

2. 3 TA の 10 分間講義について

TA として実践英語を担当したのは 2008 年の 2 学期からであるが、TA による講義の試みは 2009 年の 1 学期から始まった。竹蓋先生が提示した条件は、授業で使用している自習教材と関連させた内容にすることであった。所要時間は 10 分間であり、パワーポイントを用いて資料を作成した。

音声学の視点から学生にわかりやすく英語の特徴を子音と母音の関係、音変化、そしてプロソディの順に回を追って説明した。例文を提示する際は、条件に従ってできる限り自習教材から選定した。また、2 学期からは学生の要望を受け、TA 自身の留学体験と大阪大学における留学についても伝えることとなった（表 1）。

表 1 TA の講義回数ごとの講義内容

回数	1 学期	2 学期
1	導入	導入 1
2	英語の音声的特徴 1	導入 2
3	英語の音声的特徴 2	英語の音声的特徴 1
4	音声変化のパターン 1	留学情報 1
5	音声変化のパターン 2	留学情報 2
6	音声変化のパターン 3	英語の音声的特徴 2
7	英語のプロソディ	音声変化のパターン 1
8	全体のまとめ	音声変化のパターン 2
9		英語のプロソディ
10		全体のまとめ
11		質疑応答

3. 調査の方法

TA による講義の試みは、大阪大学の TA 受け入れに関する規程「教育者としてのトレーニングの機会を学生に提供する」や全学共通科目に係る TA の実施要領にある「将来教育・研究者になるためのトレーニング機会の提供」に則した内容になっている。しかし、この試みは実際にどのような教育的効果を TA にもたらしたのだろうか。また、TA の講義を学生はどのように受け止めたのだろうか。学生に対して WebOCM（Learning Management System ）のコミュニケーションツールを用いてアンケートを実施し、TA の教育的効果に対しては私自身が TA としての活動を通じて考えたことを記述する。

4. 結果と考察

4. 1 TA に対する教育的効果

(1) 講義の準備を通じての成長

資料を作成する際には、学生に何を伝えるかということをまず考えなければならない。一方で、10 分間で説明できる内容にするためには、「何を伝えないか」ということも決めなければならない。実際にパワーポイントで資料を作成する段階においても情報の取捨選択を何度も迫られる。レジュメを A4 用紙 1 枚で配布しようとする場合、パワーポイントのスライドは合計で 6 枚が限度なのである。

こういった作業を通じて初めて教える側の準備段階での苦労を理解することができた。10 分間という短い講義の準備ではあるが、これまで大学で教壇に立つ機会がなかった私にとっては、資料作成のための時間管理や情報の収集方法、そしてパワーポイントでの資料作成方法を学ぶことができ、教育者になるためのよいトレーニング機会だったと考える。

(2) 実際の講義を通じての成長

TA は一旦職務から離れると大学院生として大学で学んでいる。将来、教育者や研究者を目指している者もいるだろうが、依然として教わる立場にある。TA による講義の試みの特徴は、教わる側から教える側に立場が変わるということである。

講義を始めた当初は、学生の前に立って話す時にもし間違ったことを伝えてしまったらどうしようと緊張し、私の説明を聴いてくれているのか、あるいは説明した後に何も反応がないと、理解してくれたのだろうかと不安な気持ちが強かった。しかし、回を重ねるにつれ、時計の針ではなく学生の顔をみながら話せるほど余裕が出てきた。また、学生から「先生」と呼ばれることによって、教育・研究者としての意識が芽生え、教えることの楽しさも味わうことができた。

4. 2 学生に対する教育的効果

(1) 2009 年度 1 学期の TA の講義について

1 学期の講義の最終回に WebOCM のコミュニケーションシステム、「新世界」を用いて TA の講義に対するアンケートを自由記述方式で実施した。質問項目は、これまでの TA の講義に対する感想と今後 TA から教わりたい内容、そして最後に TA への要望の以上 3 つである。回答者は 42 人であった。

アンケートの結果、これまでの TA の講義について「英語の聞き取りについて今まで詳しく勉強したことがなかった」といった講義内容そのものを評価する意見や「無意識に聴いていた英語にもいろんな法則があることを知ることが出来てよかった」といったリスニングに対する意識変化も見られ、大半が肯定的な意見であった。今後教わりたい内容には、TA の学習方法や TOEFL・TOEIC といったテスト対策、スピーキングそして留学体験などがあげられた。TA への要望は、「特になし」が大半であったが、毎回のレジュメの配布が要望としてあった。

アンケート結果に見られた学生の要望や意見に対して、1 学期はパワーポイントをレジュメとして配布していなかったが、2 学期からは配布することとした。また、2 学期からは講義内容に留学関連の情報を加えることにした。資格試験対策については 2 学期から導入の段階で学習動機という視点から取り入れることとした。

(2) 2009 年度 2 学期の TA の講義について

2 学期は第 4 回目の受講後（回答者 36 人）留学の話を聞いて考えたことについて、そして第 6 回目の受講後（回答者 38 人）に今日学んだことについて、1 学期と同様に WebOCM の「新世界」を用いて TA の講義に対するアンケートを実施した。

アンケートの結果、「留学費用の内訳の表は非常に参考になった」「なかなか留学を実際にした人に話を聞く機会はないので、とてもよかった」など留学を具体的に考えるきっかけとなった。またその他に英語を学ぶモチベーションが上がったという学生もいた。

第 6 回目は英語の音声的特徴についてであったが、「英語の子音の発音と日本語の発音の仕方が違っていて難しいなと感じた」といった英語と日本語の音の違いや英語の子音についての気づきの声が多数見られた。

2学期は1学期の意見や要望を反映させることができ、自身の講義に自信を持ち始めることができた。また、パワーポイントの資料も見やすさやわかりやすさを考慮したものを作成できるようになり、講義に対する学生の肯定的な意見につながったと考える。

5. まとめ

木曜日 1 限に行われる「実践英語」での TA を担当した経験から、これまで具体的に授業の中で行ってきた TA としての職務内容を述べてきた。とりわけ、TA が 10 分間の講義を行った試みは、TA に従事する者にとっては教育者としての成長につながり、一方で学生にとっても講義終了後に投稿した「新世界」の内容から TA の講義には意義があり、TA と学生の両者にとって教育的効果があることを示した。

最後に、今回例に挙げた TA の実践は、TA を受け入れる教員の理解と協力が欠かせない。10 分間講義は TA と学生という 2 者間の取り組みが中心になっているが、本来の授業は、TA と学生、そして教員の 3 者間の取り組みの上で成立している。TA は何をするのかという問いは、換言すれば、担当教員が TA をどう活かすのかということでもある。本事例が TA の活用法の一例となればうれしい限りである。10 分間講義を提案してくださった竹蓋先生への感謝の気持ちをここに表すとともに本稿を結びたい。

参考資料

大阪大学「全学共通科目に係る TA の実施要領」2009 年度の TA 採用決定者向けの説明会での配布資料

大阪大学（2009）「国立大学法人大阪大学ティーチング・アシスタントの受入れに関する規程」
http://www.fbs.osaka-u.ac.jp/bbs/pdoc08/3/file20090402085125.pdf [2010/7/11].

津山久美子（2006）「CALL 授業の TA を通して学んだこと」『サイバーメディア・フォーラム』No. 7, pp.54-55